

明治維新に体現された天皇親政、 一君万民の理想とその挫折

折本龍則

崎門学研究会代表
浦安市議会議員



(おりもと たつのり)

一九八四（昭和五十九）年、千葉県浦安市出身。早稲田大学政治経済学部卒業。イングランドに渡り、チャベット人への日本語教育に従事。現在、浦安市議会議員、崎門学研究会代表。著書に『崎門学と『保健大記』—皇政復古の源流思想』（崎門学研究会）、共著に『藤成卿の君民共治論』（展転社）

明治維新の本義は
天皇親政の恢復

明治維新の本義は近代化でも文明開化でもなく、王政復古による天皇親政（天皇が親ら政治をみそなわすこと）の恢復に他ならなかつた。たしかに明治維新は、結果的に我が国がいち早く近代国家に脱皮し西欧列強に伍するに至つたという意味で、

世界史上まれに見る大変革であつた。しかしその本質は過去からの断絶としての「革命（レボリューション）」ではなく、回帰としての「維新（レストラーション）」であつた。それは明治初年の王政復古の大号令に「諸事神武創業之（の）始（はじめ）ニ原（もとづ）キ」と宣されたようく、源頼朝の鎌倉幕府以来七百年近く続いた武家政権から朝廷が兵馬の

「朕は若くして皇位を継ぎ、以来どうやつて万国に対峙し皇祖皇宗に仕えようか日夜恐れ入つてゐる。ひそかに考えるに、中世以来、朝廷の權威が衰え、武家が權力を専らとし、表では朝廷を尊敬しながら、その実はこれを遠ざけ、天皇が国民の父母でありながら、その赤子たる国民の実情を知らせないように計りなし、ついに国民の主君たる地位は名ばかりになり、そのため今日の朝廷に対する尊重は昔の何倍もあるようでありながら、朝廷の權威はますます衰え、君臣上下の間は天地のごとく隔たつてしまつた。このような状況で、どうして天下に君臨できようか。今般、維新的時あたり、国民が一人でも天分を得ないのであれば、それは朕の罪であるから、今日のことは、朕が自ら労苦して難難の先頭に立ち、古における歴代天皇の

足跡を踏み、統治の実績を積んでこそ、はじめて天職を奉じて国民の主君に相応しくなることができる。昔は、歴代天皇は親政を敷き給い、不忠の臣下があれば自ら大元帥として征討し給い、朝廷の政治はすべて簡素にして、天皇に対する尊重もいまほどではなかつたため、君臣上下は相親しみ、相愛して、天皇の徳澤は天下にあまねく広がり、国威は海外に輝いた。しかしながら近年、世界が大いに開け、各國が四方に雄飛するの時あたり、我が國のみ世界の形勢にうとく、旧習を固守し、維新的効力が及んでいない。朕が、宮中深くに安住し、一日の平安に甘んじて国家百年の憂いを忘れるならば、ついに各国の輕侮を受け、上は歴代天皇を辱め奉り、下は国民を苦しめることを恐れる。汝ら国民は旧来の陋習に慣れ、ただ朝廷を形ばかり尊

重して、我が國の危急を知らず、朕が一たび足を擧げれば驚いて種々の疑惑を抱き、日々に騒ぎ立て、朕の志を妨げるのであれば、それは朕に主君たるの道を失わせるのみならず、歴代天皇の治め給うたこの天下をも失わせるものである。したがつて、汝臣民は、よくよく朕の志を会得して、私見を去り、公議を探り、朕の事業を助けて、我が國を保全し、歴代天皇の神靈を慰め奉るならば幸甚である。

このように、明治天皇は名ばかりの尊皇を廢して親政の実を擧げ給い、臣民と難難辛苦を共にし、朝敵に対するは親征をも辞さないという強い御決意を示されているのである。

王政復古の源流思想
としての崎門学

明治維新は、黒船来航によつて一

朝一夕でなつたものではなく、先人たちの長い思想的蓄積と殉難を経たものであることを忘れてはならない。その上で明治維新における王政復古に多大な影響を与えた思想が崎門学である。崎門学は江戸時代前期の儒者、神道家である山崎闇斎が創始した学問であり、朱子学的な君臣の道義と我が国固有の道である神道の一一致を説いた点が特徴である。闇斎の思想は、主として浅見絅斎やその弟子の若林強斎等に継承され、正親町親通等堂上公家の門人を通じて宮中にも浸透した。また、崎門派の鶴飼鍊斎や栗山潛峰が徳川光圀に招請されたことによって水戸学とも合流し、『大日本史』の編纂にも影響を与えていた。上述した若林強斎が京都で開いた望楠軒の学派（望楠学派）は、関東の覇府（幕府）に対峙して尊皇斥霸を鼓吹し、近世勤皇運動をとくにこの精神は一段の光彩を発し来つて、宝暦に竹内式部の処分あれば、明和に山県大弐藤井右門の刑死あり、高山彦九郎慷慨屠腹すれば、唐崎常陸介之につぎ、梅田雲浜天下の義氣を鼓舞して獄死すれば、橋本景岳絶代の大才を抱いて斬にあひ、

皇の侍講を拝命して四書や『詩經』を進講した。さらに了三は、漢籍の進講のみならず、幼少にまします明治天皇の君徳を輔導し奉るべく、事に触れて忠言を開陳したが、天皇は深くこれを嘉納し給い、聖徳を高められた。このように、若き日の明治天皇の御修学には崎門学による君徳涵養が深く関わっている。『明治天皇紀』明治元年十月二十日の項には、「小御所代進講の目次を作り、東京在住の諸侯に陪聴を允（ゆる）」したまふ。乃ち二・七の日午前習字、午後『史記』講義、三・八の日午前『保建大記』輪読、午後乗馬、四・九の日午前習字、午後『神皇正統記』輪読、五の日『資治通鑑』講義の定め、熾仁親王（有栖川宮家第九代）習字に、議定東久世通禧輪読に、参与秋月種樹講義に奉仕す。二十五日始めて講筵を開かせられ、種樹『資治通鑑』の漢高祖紀を進講す」と記されている。ここに出てくる『神皇正統記』は南朝の忠臣である北畠親房が幼少の後村上天皇に献上した書であり、『保健大記』は『大日本史』の編纂に從事した崎門派の栗山潛峰が八条宮尚仁親王（後西天皇の第八皇子）に献じた『保平綱史』が元になつている。両者は共に武家台頭と朝威失墜の原因を朝廷の道徳的墮落に求め、君徳培養による朝政恢復を庶幾している。そのため歴代の天皇に対して「不諱」ともとれる批判を加えているが、これらは全て朝政恢復を志す眞の忠臣たる所以に他ならない。明治天皇はこれらの教戒の書に自身への直諫を看取し

諫めてし 人のことばもおもひ
でぬ かきのこしたる 書をひもと
よき人の いさめをきくに たど
き

動の魁とされる宝暦明和事件で弾圧された竹内式部や、幕末尊攘派の領袖である梅田雲浜、有馬新七等の志士を輩出した。

こうした崎門派の志士が明治維新に果たした役割について平泉澄氏は次のように述べている。

「君臣の大義を明かにし、且身を以て之を驗せんとする精神は、闇斎先生より始まつて門流に横溢し、後世に流傳した。こゝに絅斎は足関東の地を踏まず、腰に赤心報國の大刀を横たへ、こゝに若林強斎は、楠公を崇奉して書斎を望楠軒と号し、時勢と共にこの精神は一段の光彩を発し来つて、宝暦に竹内式部の処分あれば、明和に山県大弐藤井右門の刑死あり、高山彦九郎慷慨屠腹すれば、唐崎常陸介之につぎ、梅田雲浜天下の義氣を鼓舞して獄死すれば、橋本景岳絶代の大才を抱いて斬にあひ、

（『闇斎先生と日本精神』）
上に名の見える中沼了三は、崎門派の学者であり、京都で塾を開いて西郷従道や桐野利秋、川村純義、中岡慎太郎等の志士や十津川郷士を指導したのみならず、孝明、明治両天

其の他有馬新七、西川耕藏、乾十郎、中沼了三、中岡慎太郎、相ついで奮起して王事に勤め、遂によく明治維新の大業を翼賛し得たのである。國體を明かにし皇室を崇むるは、もとより他に種々の学者の功績を認めなければならぬのであるが、君臣の大義を推し究めて時局を批判する事厳正に、しかもひとり之を認識明弁するに止まらず、身を以て之を驗せんとし、従つて百難屈せず、先師倒れて後生之をつぎ、二百年に越え、幾百人に上り、前後唯一意、東西自ら一揆、王事につとめてやまとざるもの、ひとり崎門に之を見る」

（『闇斎先生と日本精神』）
上に名の見える中沼了三は、崎門派の学者であり、京都で塾を開いて西郷従道や桐野利秋、川村純義、中岡慎太郎等の志士や十津川郷士を指導したのみならず、孝明、明治両天

中沼了三、中岡慎太郎、相ついで奮起して王事に勤め、遂によく明治維新の大業を翼賛し得たのである。國體を明かにし皇室を崇むるは、もとより他に種々の学者の功績を認めなければならぬのであるが、君臣の大義を推し究めて時局を批判する事厳正に、しかもひとり之を認識明弁するに止まらず、身を以て之を驗せんとし、従つて百難屈せず、先師倒れて後生之をつぎ、二百年に越え、幾百人に上り、前後唯一意、東西自ら一揆、王事につとめてやまとざるもの、ひとり崎門に之を見る」

（『闇斎先生と日本精神』）
上に名の見える中沼了三は、崎門派の学者であり、京都で塾を開いて西郷従道や桐野利秋、川村純義、中岡慎太郎等の志士や十津川郷士を指導したのみならず、孝明、明治両天

リキ。或ル日具集詳カニ宝曆年間ノ事ヲ説テ曰ク」(句点筆者)云々とある。このように王政復古による天皇親政の恢復は、式部の挫折以来、朝廷においても君臣の一一致した悲願であったのであり、その悲願を成就された明治天皇は、崎門の先哲が遺された教戒の書に直諫を看取することで親政に相応しい君徳の涵養に励まれたのである。

天皇親政と一君万民の理想

ところで、明治維新で成就した天皇親政の理想は、天皇独裁や天皇專政を意味するものではない。そのことは前述した王政復古の大号令で「諸事神武創業之始ニ原キ」に続いて、「縉紳・武弁・堂上・地下ノ別無ク、至当ノ公議ヲ竭シ、天下ト休戚ヲ同ク遊バサルベキ歡慮ニ付」とあり、五箇条の御誓文で皇祖皇宗に

在する一切の中間権力を打破して一君万民の国体を顕現するのが維新の理想であった。ちなみに中野は、建武中興が失敗したのは、その理想を醍醐村上天皇の親政である延喜天暦の治に置き、明治維新の様に神武建国まで遡らなかつたからであると述べている。「後醍醐天皇は武家の横暴を憤つてこれをたおし、どこにもつて行くかといえば、武家の盛んならざりし延喜、天暦のむかしに見えるという理想である。もう一步進んで、神武建国のむかしにかかるといふところに思いつかれなかつた点に、政治の欠陥があると思う。」

中野正剛を輩出した玄洋社が民権団体として出発し、皇室の敬戴、本國の愛重、民権の固守を三則に掲げていたように、明治の民権論は、尊皇の大義と矛盾なく結びついていた。それは玄洋社だけでなく、自由党の

対して「万機公論に決する」ことが宣誓されたことにも端的に示されている。つまり、神武創業への回帰は、公議輿論に基づく政治の実現と一体不可分であったのである。中野正剛は、頬山陽の『日本外史』について講義した『建武中興論』において、幕末の志士に深甚な影響を与えた山陽の尊王論を次のように述べてゐる。

「頬山陽の理想は、天皇親政のむかしに還ることを憧れているのであります、きびしく武門政治を非難しておますが、それは武門政治であるがためにこれを憎むのではなく、特殊の権力階級が分を乱すことを憤つているのであります。彼は北条氏、足利氏を排撃するとともに、藤原氏、蘇我氏を排撃し、天皇親政のむかしに遷ることを理想としているのです。しかし山陽の理想とする天皇親政は、それから下つて相門政治、武門政治と歴史は変動し、世の中は変複雑になつて来れば、天皇親政も、一君万民の大義を秩序立てる政治の様式がなければならず、頬山陽の天皇親政論は、社会の変遷を通して、徳川時代の末期に当たつて、やがて生まれ出るべき明治の親政を示唆しているものといえます。」

このように天皇と国民との間に介

のような他の民権団体においても、皇権の伸長是則ち民権の伸長とする考えが共有されていたのである。

「惟（おも）ふに維新改革の目的が、全く皇権の克服と民権挽回を意義したるの故に、一天万乘の下、復た決して諸般の人為に出づる階級門閥の陋習を存するを許さず。先聖の遺訓に、民の富は朕の富なりと宣へるが如く、民の富既に天子の富たらば、民の強もまた天子の強にして、貧富強弱、憂樂喜戚、俱に與に君民水魚の関係を保維せざる可らずるは、王朝の古よりして殆ど不文の憲法として存在せる所の大義なり。」

…國民の自由、及民権の義、明確なるに随つて、皇室の尊榮益々顯彰するに至るべく、尊皇と民権と一緒にして終に一致なきを見るなり。」(『自由党史』)

板垣退助等が提出した民選議員設

立建白書は「臣等伏シテ方今政権ノ帰スル所ヲ察スルニ、上帝帝室ニ在ラズ、下人民ニ在ラズ、而シテ獨り有司ニ帰ス」から始まるが、この一節を以てしても、彼らの民権論が単なる西欧の模倣の天賦人権論ではなく、天皇と國民に介在する「有司」專制の打破を目的としていたことが分かる。

天皇親政運動とその挫折

このように王政復古による天皇親政、公議輿論に基づく一君万民の理想を成就したのが明治維新であつたが、周知のように維新後、権力を掌握した薩長藩閥勢力は大政を壊滅し、第二の幕府勢力と化した。これに対し、第一維新運動が全国で澎湃として沸き起り、それは佐賀や秋月、萩の乱、そしてついには西南戦争に至る一大騒乱に発展した。西南戦争

政は、單に天皇が単独で随意に政治を行うというのではなく、天皇と国民との間を疎隔する世襲的権力階層の存在をゆるさないのであります。…山陽の親政とは天皇を人民からかけはなれた雲の上の存在として、あがめ奉つておくことではなく、天皇は民とともにあって、その間に何ものの介在をもゆるさないことでなければなりません。古代の氏族

侍読を務めていた元田永孚の提議で「侍補」を創設し、元田の他、吉井友実、土方久元、佐々木高行、徳大寺実則（宮内卿）、高崎正風等を任命した。天皇に近侍する侍従と侍講、侍補の違いについて飛鳥井雅道は「侍従が『従者』としての役であり、『侍講』が知育を担当するなら、「侍補」はあくまで天皇を徳育において「補」佐する役であった。（『明治大帝』）と述べている。

大久保は「非義の勅命は勅命に非ず」といった発言に示唆されるように天皇親政に対しては消極的であつたが、西南戦争前後の政治的混乱に際して、侍補を創設することで君徳を培養し、「君民同治」による時局の打開を図つたのである。しかしその大久保も直後に島田一郎等によつて暗殺された。島田らの大久保斬姦状には、「凡そ政令法度、上天皇陛下の

政の後退は、その後の伊藤の主導による大日本帝国憲法の制定、内閣官制への移行に大きく影響した。帝国憲法の起草で活躍した井上毅は伊藤のブレーンとして知られるが、彼は同郷（熊本）である元田の弟子であり天皇親政派であった。「太政官制から内閣制への移行（明治十八年）は、天皇親政の実質化という行政責任の明確化の達成として、一般的には近代化への大きな一步と高く評価されている。しかし明治憲法の起草過程における伊藤と井上の対立に見られるように、天皇親政に対する考え方とは政府内でも大きく対立していた。伊藤の主張は後世の天皇機関説に近く、「天皇は君臨すれども統治せぬ」の考え方に対していた。これに対し、井上は天皇親政論を強く主張して、絶対君主制と立憲制との両立を模索していた。（笠原）

聖旨に出づるに非ず、下衆庶人民の公議に由るに非ず、独り要路官吏數人の臆斷専決する所に在り」と記され、彼らの目的が天皇親政の恢復にあることは明らかであった。

当時の明治天皇は、深い信頼を寄せていました西郷の死に消沈し給い、宮中に引きこもりがちであつたが、元田や佐々木等侍補一同は国事多端のいまこそ天皇親政を実行すべきと断じ、参内して直諫に及んだ。このとき口火を切った佐々木は「今日、御親政の体裁なれども、事実は内閣大臣へ御委任なれば、自然天下一般も二、三大臣の政治と認め居れり、既に彼の島田一郎等が斬姦状も、天覽あらせられたる如く、此の点を指摘痛論せり、就ては今日より屹度御憤發あり、真に御親政の御実行を挙げさせ、内外の事情にも十分通じなくては、維新の御大業も、恐れながら

水泡画餅に帰すべし」（『明治聖上と臣高行』）と舌鋒鋭く言上している。元田も後に、「陛下即位以来、万機内閣ニ在リテ、臣未タ親裁ノ実ヲ知ラサルヲ以テ頻年紛議ヲ來タシ、佐賀、熊本、山口、鹿児島ノ乱隨テ起リ随テ滅ヒ、以テ今日国会民権論の起ルモ皆是内閣ノ專制ヲ疑フニ由テナリ、故ニ今ノ時ニ當リ日一日ヨリ急ナルハ陛下親裁ノ実ヲ天下ニ明示スルヨリ先ナルハナシ」と上奏している。明治天皇はこうした侍補らの誠忠に感銘を受け給い親任を厚くされた。（笠原英彦『天皇親政』）

しかし大久保亡きあと政府の主導権を握った伊藤は、侍補等天皇親政派の影響力拡大を警戒し、元田が起草した『教学大旨』を却下し、ついには「侍補」職を廃止した。かくして元田や佐々木による一連の天皇親政運動は挫折したのである。天皇親政運動は挫折したのである。天皇親政運動は挫折したのである。天皇親政運動は挫折したのである。

明治の挫折と昭和の敗北

孕んでいたのである。まさに「玉座を以て胸壁となし、詔勅を碑文に代へ」である。

しかも、明治天皇が御親政への強い思召しを抱かれ、その為の君徳培养に励まれたのに対して、昭和天皇が英國式の立憲君主を模範とされ、極力政治に関与されなかつたことは、政治的な中心点の欠如と国家意思の不在によって我が國を亡国に導く要因になつた。徳富蘇峰は自らの終戦後日記である『頑蘇夢物語』において、敗戦の原因の一つを昭和天皇の君主としての教養に求め次の様に述べている。「主上のご教養の結果は、日本のではなく、むしろ外国的であり、恐らくは最も英國的であり、殊に英國政体上の智識を皮相的に注入申上げ、立憲君主とは、全く政治の実際には頓着なく、高處の見物をし、当局者に御一任遊ばされ、

当局者の申請する所によつてこれを裁可遊ばされる事が、天皇の御本務であるというように、思し召されたものであろう。これらの御教育が、最も御聰明なる御天稟をして、全く明治天皇とは対蹠的の御人格を陶冶し参らることに至つたものと思う。」かく述べた蘇峰は、他方で自らの親政論を次の様に述べている。

「予は天皇は日本政治の中心でいま事を信じ、同時に天皇は我が国家の一大家族の家長にています事を信ず。……若し単に天皇を家長と仰ぐばかりで、政治の外に置くという事になれば、天皇は全く英國の皇帝以上に、政治の機構から離脱遊ばざるものといわねばならぬ。そして皇室を、全く鎌倉より徳川時代までの、皇室同様にするものであつて、維新改革の目的とは、全く背馳（はいち）することとなる。維新改革の

目的は、一君万民、天皇と国民とが、ピッタリ密接するという事を主眼としたものである。しかるに天皇を政治機構の中心より外に置くとするならば、摂関政治か將軍政治かの外に途は無い。摂関政治、將軍政治の不可なることは、今更ここに論ずるまでもない。」

蘇峰にとつても同様に明治維新的本義は天皇親政の恢復であり、御親政の後退と英國流の立憲君主制の模倣は明治維新の挫折に他ならなかつた。そして親政の後退は、やがて名ばかりの天皇主権の下で、内閣と政党、軍部、軍部でも陸軍や海軍、陸軍省と參謀本部といったようにあらゆる政治権力の割拠と国家的統一意識の不在をもたらし、ついには昭和の敗戦と亡國を帰結したとも言いうのである。現代を生きる我々はこれを歴史の鑑戒とせねばならない。

日米開戦八十年。 開戦要因は満州にあつた

岡村 青
文筆家

日米開戦の要因は何だったのか。
改めて検証する

本年は一九四一（昭和十六）年十二月八日に勃発した日米開戦からちょうど八十年になる。この節目に当たつてあらためて開戦に至つた経緯について管見を、と思う。すでに言われていることではあるが、日米開戦はアジア地域を主戦場にして起つたことや、太平洋のすみつこの

（おかむら あお）
一九四九年茨城県生まれ。中央大学付属高校中退後新左翼活動。その後フリージャーナリストとなり、現在にいたる。おもにテロル・暗殺・クーデターをキーワードに、近現代史をライフワークとする。



ほうにちんまりとあるトウガラシのような形をしたちっぽけな島国が、歐米列強に対して初めて徹底抗戦に挑んだことと合わせ、さらに彼らによる植民地支配、あるいは黄色人種に対するアングロサクソンの人種的、文化的蔑視、隸属化などの特質性が複雑にからみ、単純なものではないという理由から再検証を試みた。

さらにもうひとつ付け加えるならば、日米開戦は從来の戦争形態を一

変させた面も見逃せない。日清・日露戦争は地上戦が主流であつたため歩兵中心だった。けれど第一次世界大戦を契機に兵器の近代化が進み艦船、航空戦力が強化されて総力戦となつた。戦場もいくつもの国境をまたぎ、そしていくつもの国土国民を巻き込み、グローバル化したという点もある。

ともあれ日米開戦の要因には一般的に以下の説明が有力だ。一九三九

あなたの腎臓を守ります！
腎臓の透析は、私が止めてみせる！

椎貝クリニック理事長 椎貝達夫 著

腎臓病に悩む全ての人に、名医が答える
「保存療法」4本の柱で、腎臓病の進行を抑え、透析を避ける

たちばな出版 A5判 2色刷り 定価（本体1300円+税）

〒167-0053 東京都杉並区西荻南2-20-9 たちばな出版ビル
株式会社たちばな出版 ☎03(5941)2341 FAX 03(5941)2348

